

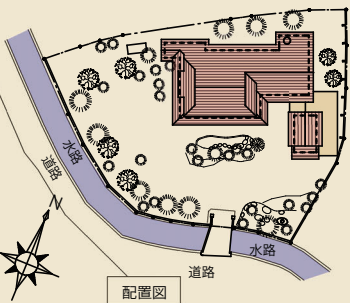
リフォームの概要

■ 背景

国分清水の麓地区周辺に建つこの建物（旧中島邸）は、宮崎県在住の所有者が管理のために足を運ばれていたが、高齢になり手放すことになった。一時期は建物を解体し賃貸事業にとの話もあったそうだが、日本人でアメリカ在住の施主が「人生の最終章の地」としてこの土地と建物を購入された。

■ 調査・分析

この建物は麓地区周辺である事や、しころ風入母屋屋根や書院造りである事から武家住宅と考えられる。田の字型の和室空間（おもて）から、床を一段下げた幅1m程の板の間（てのま）へ、そこから台所のある生活空間（なかえ）とつながる構成は、南九州に多く見られる伝統的な手法であり、現存する文化財の民家などと比較しても、その特徴は酷似しており、この建物は「二ツ家造り」であると考えられる。



■ 想い

アメリカ在住の施主はご夫婦2人と愛犬1匹の暮らし。お二人とも鹿児島県出身ではないが、日本全国をいろいろと旅をされて終の棲家としてこの場所を選ばれた。今後の人生は、土をいじり植物を育て自然と触れあいながら暮らしてゆきたいとの希望。更に「自分たちが住んだ後は、またこの家を大切にしてくれる次の誰かに引き継いでゆきたい」という思いを持たれていて、それが設計のコンセプトとなった。

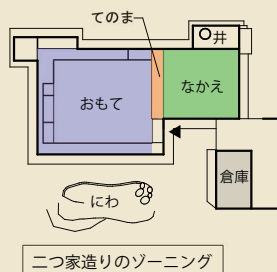
■ 構想・思想

長い時を掛けて多くの人達の人生を育んできたこの家は、現代社会ではどんなにお金を掛けても同じものを造る事は困難。次の誰かに引き継ぐ為に、建築当初のオリジナルデザインや長い生活の中で生まれた知恵や工夫は出来るだけ残す様に心掛けた。昔は当たり前だった土間の台所や、段差のある床も現代建築の中では不便面があるかもしれない。確かにバリアフリーやユニバーサルデザインは大切であるが、全てを人間に合わせる建築ではなく、昔の暮らしがそうだった様に「人間が建築に呼応する暮らし方」もあって良いのではないかな。それは公共建築では出来ない「自ら暮らす家」だからこそ成り立つ。ただし、そうはいっても夏の暑さや冬の寒さを考えると省エネ性能は大事であり、南海トラフによる大地震が叫ばれる昨今、耐震性も重要な要素となる。建設当時はなかったこれらの概念も、現代の住宅では無視できない大きなポイントであり、これらの性能を向上させることも併せて計画した。

■ リフォームのルール

「二ツ家造り」のこの建築は、建築物として歴史的評価が出来る建物である。しかし、生活の事を考えると保存的な改修だけでは快適性を満足する事は出来ない。そこでこの建物の改修設計をするに当たりルールを決めた。建物を「保存重視」と「リノベーション重視」の3つのエリアに分ける計画とした。

- ・床の間のある「おもて」部分は格式の高い場として＝「極力形態を変えないエリア」
- ・北側の寝室は床の間の意匠にからむので＝「必要に応じた小規模改修エリア」
- ・LDKや水廻り部分は衛生面の改修もあり＝「自由な創造が可能なエリア」



リフォームの手法

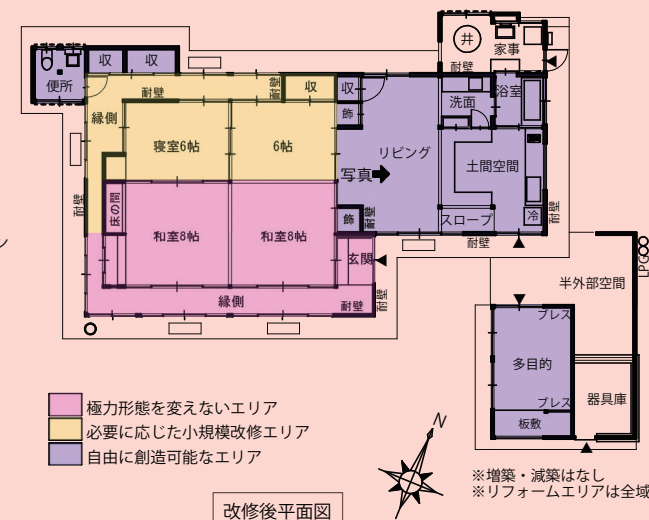
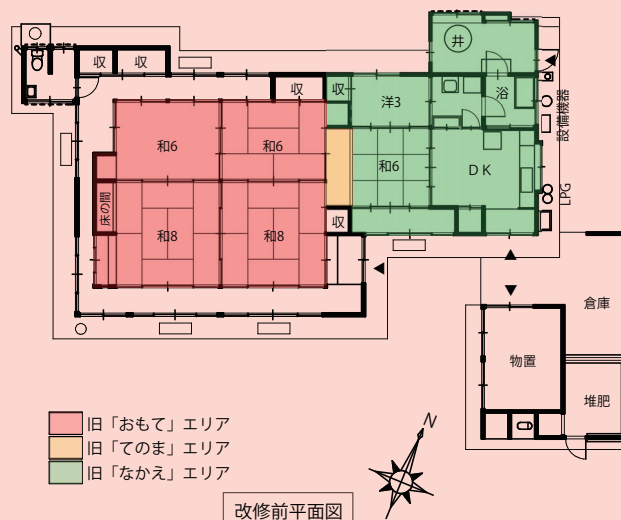
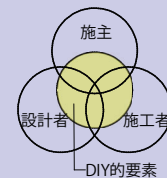


■ 改修内容

- ・ひずみ直し＝敷居や鴨居のレベル調整
- ・雨漏り＝屋根下地や屋根材の葺き替えによる改善
- ・耐震性＝瓦葺きから銅板葺きに軽量化
＝筋違い等バランスよく用い揺れを抑制
- ・省エネ＝屋根直下に通気＋断熱層を設置
＝外壁面に断熱層及び気密材を設置
＝土間を含む全ての床に断熱層を構築
- ・設備＝合併浄化槽・水道配管・衛生器具の取替
＝電気配線・照明・コンセント・スイッチ類
＝空調機器・サーキュレーター、換気扇
＝井戸の整備（水質検査及び配管）
- ・外構＝敷地内にある石や植物を整備
- ・仕上＝杉、桧板張り、漆喰、モルタル、タイル張可能な所は既存を利用する
- ・素材＝自然素材、現場から出る木材、石、竹など
- ・備品＝現場にあった竹かご、農機具など再利用品

■ 現場の雰囲気

施主は現場に滞在され建物内に残された家財、農機具や竹かご、食器などを選別した。この時に残された物が後々の工事でも役立った。工事中も自ら清掃や作業の手伝いをされ、施主がいる事で話し合っ進めるDIY的な形がいつしか生まれた。現代の設計監理や請負契約とは少し違う形は始めは戸惑いもあったが流れができてスムーズに進み施主、設計者、現場監督、そして職人ひとりひとりの気持ちがつながり最終的には大きな成果に繋がったと思われる。



※増築・減築はなし
※リフォームエリアは全城

リフォーム前 → リフォーム後



＜床の間＞
リフォームのルールとして「極力形態を変えないエリア」とした床の間。愛犬と暮らす可能性と長い海外の暮らしか床は畳にせず杉板フローリングに改修。



リフォーム後



＜寝室＞
床の間から続く寝室は床の間の一部として見えることから「必要に応じた小規模な改修エリア」とした。仏壇置き場は施主提案で植物育成ライトを設置し植物も置けるようになった。



リフォーム後



＜居間・食堂＞
生活空間だった台所は「自由な創造が可能なエリア」とし既存の床、壁、天井を全て取り除き現れたオリジナルをそのまま見せた。床を土間に戻す事で低かった梁も残せた。



リフォーム後



＜外観 南側＞
瓦の重みで軒先は波打ち谷間部分は漏水も確認された。耐震化と漏水修理を兼ねて金属屋根に改修。外壁は板壁が中心であったが傷みの少ない玄関以外は張替えた。



リフォーム後



＜外観と築庭＞
不陸の在った軒先は断熱用角材で水平に整った。築庭はソテツ等の植栽が茂りブロック積み池跡もあったが施主自ら敷地内にあった石を敷き並べて石庭へと変貌を変えた。



リフォーム後



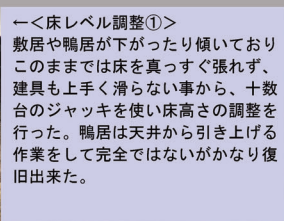
＜倉庫 多目的空間＞
便所、米蔵、物置に分かれた別棟の倉庫は農機具や竹かごなど多く残されていた。仕切りを撤去しプレス補強と大きなFIX窓で遊び心のある多目的空間として蘇った。



リフォーム後



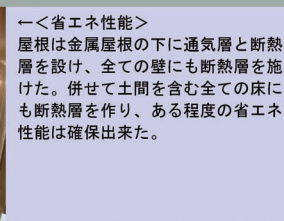
＜床レベル調整①＞
敷居や鴨居が下がったり傾いておりこのままでは床を真つぐ張れず、建具も上手く滑らない事から、十数台のジャッキを使い床高さの調整を行った。鴨居は天井から引き上げる作業をして完全ではないがかなり復旧出来た。



リフォーム中



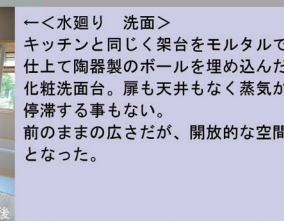
＜省エネ性能＞
屋根は金属屋根の下に通気層と断熱層を設け、全ての壁にも断熱層を施けた。併せて土間を含む全ての床にも断熱層を作り、ある程度の省エネ性能は確保出来た。



リフォーム中



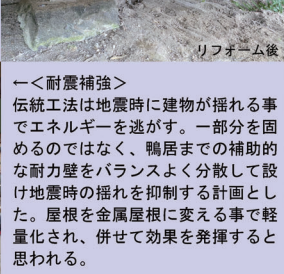
＜水廻り 洗面＞
キッチンと同じく架台をモルタルで仕上り陶器製のボールを埋め込んだ化粧洗面台。扉も天井もなく蒸気が停滞する事もない。前のままの広さだが、開放的な空間となった。



リフォーム後



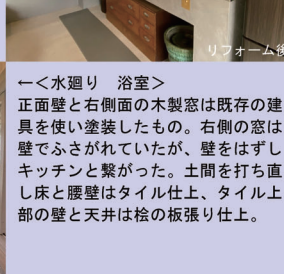
＜床レベル調整②＞→
ジャッキアップの床レベル調整で、床束の下端に生じたすき間に無収縮モルタルを詰めた。新築から長い時間が経ち少しずつ沈下した部分を補う事ができた。



リフォーム後



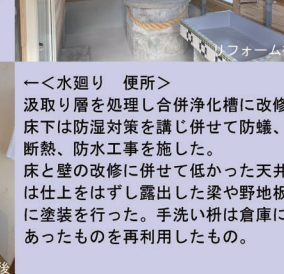
＜水廻り 台所＞→
既存の流し台は撤去して新たに利用者の希望に併せたサイズで造作した。モルタル造りの架台にステンレス一体シンクを載せ、下の食器棚は前の住人が残したタンスを整備して、再利用したもの。



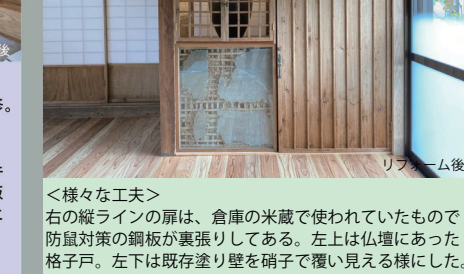
リフォーム後



＜水廻り 家事室＞→
倉庫として利用されていた空間を整備して家事用のサービスヤードとして利用できるように整備した。井戸は水質検査の結果利用できるとの事で便所、洗濯、外部水栓で利用。何より緊急時の時には活躍すると思われる。



リフォーム後



＜水廻り 浴室＞
正面壁と右側面の木製窓は既存の建具を使い塗装したもの。右側の窓は壁でふさがれていたが、壁をはずしキッチンと繋げた。土間を打ち直し床と腰壁はタイル仕上、タイル上部の壁と天井は桧の板張り仕上。

リフォーム後

＜水廻り 便所＞
汲取り層を処理し合併浄化槽に改修。床下は防湿対策を講じて防蟻、断熱、防水工事を施した。床と壁の改修に併せて低かった天井は仕上をはずし露出した梁や野地板に塗装を行った。手洗い枧は倉庫にあったものを再利用したもの。

＜様々な工夫＞
右の縦ラインの扉は、倉庫の米蔵で使われていたもので防鼠対策の銅板が裏張りしてある。左上は仏壇にあった格子戸。左下は既存塗り壁を硝子で覆い見える様にした。

応募者	設計者	施工者	築年数	構造	建方形式	竣工	工事期間	工事費	所在地	リフォーム内容
岩田 幸千	有限会社 千匠設計 岩田 幸千	株式会社 堀之内建設 堀之内 茂樹	約80年	木造	伝統工法	令和6年5月	125日間	2,600万	霧島市	- 浄化槽を含む水廻りの整備 - 耐震性・省エネ性の向上 - 機能回復及びオリジナルデザインの復旧